

多くの人は認めたくないかもしれませんが、たまに心を揺さぶられない説教の合間に、何気なく上を向き、礼拝堂の天井の色鮮やかなパネルを見てうきうきしたことがあるのではないのでしょうか。いくつのパネルがあるんだろう？誰が描いたんだろう？システイーナ礼拝堂のミケランジェロのように、芸術家があおむけになって描いたんだろうか？



1979年、ジョアン・チャウが社会学の授業で『オグラファミリー』という題で文章を書きました。下記に書き記したものはその文章から抜粋したものです。

「私の曾祖父の場合、良い暮らしをしたいとか、裕福になる為の道と考えてハワイに移住したわけではありませんでした。彼は裕福な家庭で育ったので、ハワイに住むのは経済的な理由ではありませんでした。彼の父親はたくさん田畑や醤油工場を持っていました。

それよりも、芸術の分野に進みたいという渴望を満たすための、個人的探求の旅でした。父親が自分の理想を息子に押し付けるとい昔からよくある話です。

私の曾祖父、オグラユウノスケは、彼の父がユウノスケに医師になって欲しかった為に彼は家出をしました。1884年、彼は横浜からイギリスの船に乗りました。彼は船の船底で石炭をショベルでかきこむ仕事をさせられ、コーヒーとクラッカーで生き延び、洗濯物を竹竿に付けて海で洗っていました。ユウノスケは真の芸術家でした。彼は若い時から芸術を学び愛していました。彼は航海の途中、休みの時には、香港をはじめ、ドイツ、フランス、イギリスなど世界中の港に上陸しました。そして多くの美術館などで時間を過ごしました。彼はのちに自分の子供たちに“アフリカ以外はどこにでも行った”と度々言っていました。

2年間の旅の後、ユウノスケは日本に帰りたと思ったのですが、その頃父親が亡くなったことを知ったのです。そして義兄が千葉の家族の土地や醤油工場を売ったと聞いた後、ユウノスケはホノルルで船から逃げ出すことを決め、仲間たちと陸にあがり、何日間かパンチボールのクレーターに隠れました。彼らは最終的に船が港を離れたのを見て、そこから出て来ました。

ユウノスケのポケットには75セントしか入ってなくて、ユニオン通りにあるウィリアムフレームワークという店で職を見つけ、絵を描いたり、写真の色を調整する仕事をしました。彼は一年間ここで働き、1887年に嫁を探すために日本に帰って来ました。彼と妻、シュウは結局ハワイに帰って来て、8人の子どもを育てました。ユウノスケは家族を養う為にホテル通りにあるキングブラザーズで10年間働きました。

ユウノスケは、アメリカに住んでいるからには、言葉も着るものも、そこの習慣に従うように子供達を教えました。彼の中でアメリカ人のようになるということの一つが、アメリカの宗教を取り入れるということでした。彼の子ども達は全員、教会に定期的に通わせていました。奥村多喜衛牧師とユウノスケが良い友人だったことも幸いでした。奥村牧師は一世や二世がアメリカ人のようになることやアメリカへの愛国心を示すようにする重要な人物像として知られていました。

奥村牧師は友人のユウノスケにマキキ教会の新しい礼拝堂とロビーの天井に絵を描くように頼みました。誰がその絵のテーマを花にすると決めたかは分かりませんが、それらは自然の栄光に敬意と落ち着いた雰囲気を与えてくれます。花や植物が描かれた161枚のパネルは、取り付けられる前に一枚一枚描きあげられなくてはなりませんでした。

（『その後の物語』は、1932年マキキクリスチャン教会小冊子、1987年会報、1956年パッツィーサイキによって書かれたホノルルアドバタイザーの記事、1979年春ワイホナの記事、ウィキペディアやこの著者の個人資料から抜粋しました。）

「ユウノスケはハワイを題材にした絵画を描く初めての日本人画家として、また画家ボルケーノ画家養成学校出身の芸術家として知られています。ボルケーノスクールは、夜の印象的なハワイの火山噴火景色を描くハワイ原住民ではない画家のグループです。キラウエアやマウナロアは1880年代と1890年代にわたって、断続的に噴火があったこともあり、その頃ボルケーノスクールは最盛期でした。キラウエアに行くには、馬に乗って往復2、3日かかる困難なものでした。ユウノスケの作品のひとつで、『キラウエア』というタイトルの絵は、ホノルル芸術美術館のボルケーノスクール作品の一部として展示されています。」

私達の教会の礼拝堂には116枚のパネルがあり、他45枚のパネルと2枚の壁画がロビーにあり

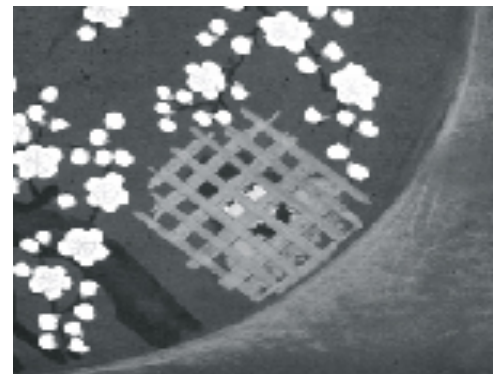
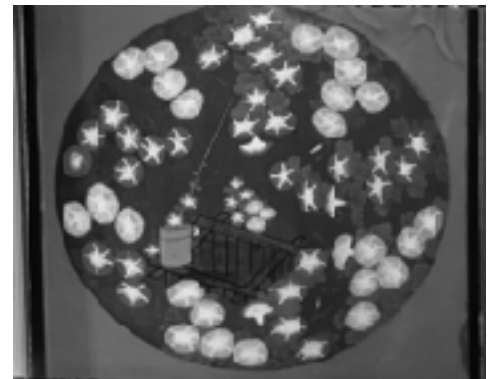
ます。もし時間と興味があり、礼拝堂とロビーが明るいけれど、混み合っていない時、望遠レンズ付きカメラか双眼鏡で天井をじっくり見てみてください。礼拝堂で全種類の華々しい草花を見ることが出来ます。もみじ、菊、アサガオ、ザクロ、ハイビスカス、アイリス、桜、梅、牡丹、ひまわり、ジャズミン、メロン、梨、雛菊、百合などまだまだあります。もっとよく見ると、花達の中に色んな種類の生き物；ミツバチ、スズメバチ、カエル、トンボ、蝶々などもあります。ロビーのエルム通り側の壁には竹林が描かれていて、ライクロフト通り側の壁には、富士山を背景に美しい松の木の風景が描かれています。全ての絵は、ユウノスケからマキキ教会へ寄付されたものだと言われています。

彼の最も興味をそそられる作品は、ロビーの天井のパネルです。いくつかのパネルには、花のデザインの中に独特なものが描かれていて、古いことわざか謎めいた詩などを絵で表しています。木製のバケツと井戸と一緒に描かれたアサガオのパネルは、加賀千代という江戸時代の有名な女性詩人の詩にちなんでいます。

『あさがおに つるべ取られて もらい水』

瓜畑に靴が描かれているパネルは、「瓜畑に靴を納れず（瓜畑の。中で句碑もを結び直すな。瓜を盗むと疑われる）」と忠告しています。麦わら帽子と梨の書かれた3枚目のパネルには、「李下に冠を正さず（梨の木の下で帽子に手をやるな。（梨泥棒に間違われぬように））」と注意しています。その他の6枚のパネルにも、隠された物が描かれています。ひとつは、地球儀に輝く日本が描かれているもの、他にはピンクの桜の花の中に半月が描かれているもの、日本のうちわ、馬の頭、漢字の巻き物などです。ピンクの梅が描かれているパネル（すべてのパネルの中で、たった一つ人間の姿が描かれているパネル）の角に長い黒髪で、濃いひげの男性がいて、太い木の格子の後ろから大きな目で見つめています。これは誰なのでしょう？描いた人が私たちに何か言おうとしているのでしょうか？ここにあるメッセージは何なのでしょう？これらの6枚のパネルの説明は、筆者の私にはまだわかりません。これらの絵の意味を解読出来る方はおられますか？

オグラさんは自然を愛し、神様の創造の御業である美しさを、真の芸術家の心で、大切に想っていたに違いありません。彼にはまた、皮肉っぽいユーモアがあり、私たちの素晴らしい世界にある秘められた神秘にも興味があったのでしょうか。神様は私たちの教会に集う奥村牧師ご夫妻、チャックとスー・ウォング、フランクとスマコ・ムラカミ、コダマイツキ、オグラユウノスケなどの人々の人生を通して、長年にわたり力強くまた記憶に残る形で私たちの教会に働いてくださっています。神様、あなたの教会の本当にたくさんの信仰者の人生を豊かにしてくださり、壮大なあなたの御業、深い愛を見せてくださり感謝します。



本文は'From the Archives...' 英語部週報インサート 2017年9月3日号の日本語版です。

本文：ウエイン・タダキ 日本語訳：フロイド由起